

柳田国男とナマハゲに関する覚え書き

——「なもみはげたか」補論——

八 木 康 幸

はじめに

『定本柳田国男集』の「総索引」に拠るならば、柳田国男が最後に「ナマハゲ」に言及するのは、一九五一年の『國學院雜誌』に掲載された「瑞穂国について」である。同年五月一日の、國學院大學大学院開講を記念する同名の講演をもとにした論考である。

旧日本の農村で正月十五日の前後に、少年青年が仮装して家々を訪れてあるく風習は、それ自身最も注意すべき民俗であるが、私などは是を南端の至つて特異なる類例と比較することによつて、始めて其根原を明かにし得る望みのあることを、かねてから人に説いて居た。さうしてこの方面の変化が新らしく且つ単純であつて、其過程の尋ね究めやすいことが、近頃になつて愈々判つて来たのである。この方の多くの実例を見比べて行くと、大半はすでに児女の遊戲に近くなつて居る中に、たゞ奥羽の北辺に存するスネカ・火カタタクリ、又はナモミハギ・アマメハギなど、いふものが、却つてまじめなる若者の作業として保存せられて居る。しかも彼等が身を隠し神に扮したいでたちは、最初は蓑笠又はそれよりも更に原始的な方法であつたのが、男鹿半島の所謂ナマハギなどになると、もうすでに自製の怖ろしい仮面を被ることになつて居る。

(柳田一九五一・一三～一四)

「南端の至つて特異なる類例」とは、八重山群島に分布する「神を装うた者の巡暦」を内容とする「大体に同じ系統と見られる神態」であつて、「たとへば私がもう三十年も前に、『海南小記』の中に報告して置いた、石垣島宮良のニイル人の如きも、その一つの形であつたことが追々と明かになつて来た」と柳田は述べる。たしかに柳田が、石垣島の「二色人」や「まやの神」と本土の初春の行事を対比して見せたのは、『東京朝日新聞』に連載した「海南小記」の「二色人」(一九二一年四月三〇日)であつたから、講演時はまさに三〇年ちようどの歳月を経っていたことになる。本土におけるいわゆる「小正月の訪問者」の行事と、南西諸島に伝えられるアカマタ・クロマタなどの「人の世界を見舞ひたまふ神」(柳田一九二五・三六九)の行事とを、「根原」が共通するものとして捉える見方は、柳田の中に長く保持され続けていたのである。

柳田は当初から「男鹿半島の所謂ナマハギ」に着目していた訳ではない。ホトホトやカセドリなど、全国数多くの小正月の訪問者の行事にナマハゲの類を加えて、議論の際にそれらを不可欠の要素として扱うのは、一九二六年『婦人之友』一月号掲載の「雪国の春」をもつて嚆矢とする。そこには、折口信夫が繰り返し引用することになる「ナモミ剥ぎ」の新聞記事(一九二五年二月四日)の影響を考え得る(八木二〇二〇)。本稿では、あらためて柳田の議論をたどり、ナマハゲが対象化される過程を明らかにしたい。なお、行論上、柳田による初出文献の記述を少なからず引用した他、先行研究で既に指摘された事実を繰り返すことも躊躇しなかった。あらかじめ断っておきたい。

一 小正月と子供

柳田が小正月の行事と子供の関わりに注目したのは、一九一五年『郷土研究』収載の「柱松と子供」である⁽¹⁾。「柱松考」に始まり神が降臨する樹木や柱を論じる、おもに尾芝古樟の筆名による一連の論考は、のちに『神樹篇』（一九五三年）にまとめられた。「柱松と子供」はその第二論文をなす。

柳田によれば、一月には左義長やトンドがあり、七月には盆の柱松があるように、盆と正月の二つの火祭には深い関係がある。共通点が多い盆と正月は「一年を平分する両度の節目」といえる。七月一五日の習俗は仏教の教義に融和したが、トンドやオンベ焼きのように子供をしてサイノカミを祀らせる正月の火祭の方は、仏教の影響を受けていない分だけ多くの旧形を留めている。柱松に限らず、正月一五日には仮屋をたてる事例が各地にあり、子供たちが遊んだり祝言を述べたりする。道祖神祭に少年が四尺ほどの船の形を造り、これに五色の幣を立てて家々を勧進することもある。これら全国各種の行事からは、子供が道祖神を代表した昔の風習を窺い知ることができる。この日にかぎり子供たちに無理な物ねだりを許し、自由勝手な享楽をさせたのは、もとは童児を道祖神の依坐とし、ご機嫌を損なわぬよう努めた遺風ではないか。柳田は、小正月の行事における子供の宗教的な役割をこのように考察した。

一九一七年『郷土研究』所収の「トビく」では、「正月十五日の行事には、兎に角に小児に関係あるものが多い」として「柱松と子供」の自説が、「伊豆駿河の御幣焼」「磐城の鳥小屋」や、寄せられた多くの報告によって「空想で無かつたことを証し得た」とする。とりわけ柳田にとって、安藤英方による因幡の「ホトく」の記事は注目すべきものであった。

安藤によれば、旧正月一四日の夕方にホトホトが来る。村の子供または小若衆が顔に鍋墨を塗り、蓑を着たり笠を

被つたり、さまざまに変装を凝らして旧家を巡る。「ほとほと」と言いながら家に入り、古風に錢縹を土産物として差し出すと、各家では即座に小餅を一つずつこれに与える。また、同じ日の晩方には若衆が集まり、輪にした綱に男根の形を取り付けた「オモガイ」と称するものを藁で作る。これを手土産に奇抜な仮装で村の重立った旧家を訪問し、横柄な態度で色氣話をしたり、家内安全五穀豊穡に関係することを喋り立てたりして餅や米などを貰うと、オモガイを置いて去る。この一行もまたホトホトと呼んでいたかと思う、と安藤は記している（安藤一九一五）。

柳田もまた、土佐の「カユヅリ」、会津地方の「カセトリ」、仙台付近の「チャセゴ」、周防長門の「トヘ〜」、上総長生郡の「タバ〜」など、おもに子供が主役となつて家々を訪れ歩く各地の小正月行事を典拠⁽²⁾とともに紹介した。同時に「ホト〜」が戸を叩いて訪れるさまを口で真似たものであり、「トベ」が「給へ」という語に過ぎないらしいことも推察している。「大同小異を以つて尤も広く行はれて居る」これら風習を、初めて共通する一群として提示したのである。

他方、柳田は「柱松と子供」を引き継ぎ、道祖神の祭主である子供という主題にもなおこだわりを見せている。訪問者が大根や附木で作った「大判小判俵の類の目出たい物」や、藁で馬の形を作つたもの、さらに「今一段滑稽なる物」を持ち歩くのは「やはり嫁祝ひの棒など、一様で、偶々此行事に特に珍しい名称の無い府県の子供の勧化ももとは一つであつたことが想像せられる」と述べて、越後の「幸神勧進」に言及し、江戸、大阪、甲府などでも「道祖神の祭に際しては常に此類の子供の我儘が行はれ、それが又この正月十五日を以てする例が多かつた」と指摘する。報告は次のように締め括られている（以下、引用文の仮名遣いは原文通りとし漢字は通行の字体に改めた。ルビは省略した）。

子供を祭の式に与らしむることは決して道祖神だけでは無いけれども、殊に春の始の此祭に於て最も盛であるのは、何か然るべき理由のあることであらう。而して此式が殊に猥褻な事の多いのは初春に作物の豊熟を祈ること、関係があるに相異なる。

子供は此際祭らるゝ境の神と殊に因縁が多い為に、偶然此様な今日から見れば不行儀な任務を負はせられたと云ふに止まるものと思ふ。

(柳田一九一七・五〇)

「トビく」の報告は、「柱松考」に始まる神の降臨の問題から、小正月行事と子供という独自の主題を派生させた。それを整理して見せたのが「小正月の晩」(『東京朝日新聞』一九二三年一月一六日)と題する解説記事である。前半は、小正月にトンド、左義長をはじめ、管粥、田遊び田楽または田植芝居、土鼠打ち、鳥追い、成木責など、農作に關する模擬行為を含む、さまざまな予祝儀礼、行事などの古いしきたりが行われてきたことを説く。そして「大体に於て小正月は子供の日と謂つてもよい。彼等は道祖神の神主として、御幣即ちとんどの管理者として、又鳥追小屋の主人として、常には持たぬ自由を認められて居たのみならず、多勢集まつて其年の花婿に水を掛け、大事の花嫁の臂を打ちに来た」ことにも触れて、この日の晩の重要性が人間にも及ぶと考えられていたらしいことを指摘する。後半では、子供が家々を訪問する習俗に話題を移す。「道祖神の神主」は優越的な話題ではなくなる。

だから此晩の月明りに、村中を廻つてあるく少年たちは、或地方に於ては主として稲作の豊熟を祝ひ、他の地方では花嫁の丈夫で、子福者ならんことを予言した。家々では兼て用意した餅やおひねりを之に遣り、又笑つて無邪気なる猥褻の語を聴いた。憎まれて居る家などでは、無茶な悪口をされることもある。其が何兵衛の小倅と判つて居ても、此晩に限つては彼等は支配者であつた。さうして如何にも神の使などのやうに、不思議な形式を以て訪問すること、是が亦小正月の大なる興味であつた。

(柳田一九二二a)

このように述べて、「トビく」の報告と同様、因幡伯耆の「ほとく」を始め、備中の奥の「ことく」、安芸中部の「とろべいく」「とのべい」、周防長門から九州各地にかけての「とびく」「とべく」、東上総の「たびく」、

土佐の「粥釣」、会津の「かせとり」、越後の「道祖神の勧進」、仙台近在の「茶世子」「餅切」「餅打」など、各地の行事を紹介する。行事の呼称として明瞭なものあれば、行事名称をもたずにかけ声をもつてそれと指し示す例も含まれる。さらに、行事の担い手が子供から大人に変化したものがあることも示唆されている。事例はより詳しく、柳田の関心の持続が窺える。

彼等の手にする木の棒は愈異形で、之を振り立て、おんがれ〜と謂ふなどは露骨の至りである。又とろへん〜とか、とろめん〜とか謂つて来る所もある。後にはい、年をした者も加はつて、悪ふざけの仮装踊になつてしまつたが、之を歓迎した最初の心持は、斯うして貰はぬと生活の不安が休まぬのだから、即ち嚴重な儀式であつたのだ。

(柳田一九二二a)

小正月と子供をめぐる議論は、柱松の主題を離れ、道祖神の祭主を相対化し、小正月に子供らが「如何にも神の使用などのやうに、不思議な形式を以て訪問する」行事に向けられることになつたのである。

二 海南小記の旅と「二色人」

「小正月の晩」において、柳田はさまざまな小正月の訪問者の行事を紹介したが、「鳥追いと謂へば江戸では門付けの特殊なものの名であつたが」と述べる以外には、職業的な祝福芸に触れるところはなく、ましてや沖縄の神に言及することはなかった。ところがその前年には、これらを対比する記述を残している。『東京朝日新聞』に連載された紀行「海南小記」の「二色人」の回である。

「定本年譜」によれば、海南小記の旅は、一九二〇年十二月から翌年三月にかけて行われた。鹿児島から乗船して那覇に到り、沖縄本島、宮古島、石垣島を巡つて、再び沖縄本島から奄美大島と加計呂麻島を経て鹿児島に戻り、九

州各地で講演を重ねて帰京した。途中、久留米明善校で「阿遲摩佐の島」のもとになる蒲葵の話をしている。「海南小記」は『東京朝日新聞』に一九二一年三月から五月にかけて、三一回に亘って連載された。二九回「二色人」は四月三〇日の掲載である。

柳田は、石垣島の宮良村で「二色人」が出る祭の話聞いた。石垣島の宮良、新城島、小浜島、西表島古見に伝えられてきたもので、石垣島の川平と梶海には、よく似た「まやの神」の儀式が行われる。宮良の海際には「ナビントウ」という崖の岩屋がある。毎年六月「穂利祭」の二日目の暮方には、この洞から「赤又黒又」の二神が出て家々を巡る。夜通し村の中を歩いて、夜明けには洞の奥に還っていく。次の日は村の男女がこれに参詣する。人々は神の名を呼ぶことを憚って、単に「ニイルビヅ」という。「即ち赤と黒と二色の人」を意味する。

本を削って作った怖ろしい面で、赤は黒よりも猶一段と怖ろしいさうだ。茅や草の葉を身に覆うて、人がこの面を被ると云ふことだが、自分は信徒に対する敬意から強ひて拝見を求めなかつた。実際新宮良の住民は、祭の日に人が神と為ることをよく知つて、而も人が神に扮することは知らぬやうである。

(柳田一九二一b)

「祭の日に人が神と為ること」以下の表現は言い得て妙である。本土の事例からは感知できない村人の信仰の篤さに、柳田は強い衝撃を受けたものと思われ、そのことは面の「拝見」を求めなかつた行動にも現れている。村人の敬虔さは、家を清め香を焼いて神の来臨を待ち、その伝える言葉を聞く態度にも窺うことができた。二色人が旧家前盛家に来て言う詞は一定しているが、他の家々では形式が色々あり、不幸のあつた者は慰め、無事の者は激励し、いずれも次に来る年が、さらにめでたくまた豊かであることを、親切にかつ面白く言つて聞かせる、と柳田は述べている。

初春に吾々の門に来る春駒鳥追、其他種々の物吉ほぎ人と違ふ点は、単に家主が予言者の前に跪いて、一句毎に丁寧受答へをするばかりでは無い。彼等は之を直接に神の御詞と信するが故に、如何な事が有つても村外の者に、其文句を知らしめぬ。是非とも聴かうとすると、うそを教へるさうである。

(柳田一九二一b)

季節の違いを超えて比較するのは、正月を言祝ぐ本土の芸能者たちであり、かれらには望むべくもない神と人との秘儀的で内容の伴った言葉のやりとりが、この島の祭にはあることが示唆される。同じ類の懸隔は、本土の小正月の子供の行事との間にもあった。

吾々は無邪気な童子等の口を仮りてせめては春の初めには耳に快よい祝福の言を聴かうとしたが、根本に於て既に絶るべきものを忘れた為に、是も亦古臭い戯れごとと為つてしまつて、正月は更に不安を新にする。之に比べると沖の小島は幸ひであつた。都鄙の区別を教へる講師も国の司も居らぬ故に、永く神の御幸の昔の悦ばしきを味はふことが出来た。さうして其神は又果知らぬ海原から、天に続いた地平線の向ふから。安々と其小舟を、島の渚には漕寄せることを得たのである。

(柳田一九二一b)

柳田は、はるか遠くから神が来臨して村人に祝福を与える祭を知ることにより、特別な言葉を伝える神の役割に思いを深くしたはずである。同時に、子どもによる小正月の訪問者の行事を対比させて、本土の側が「根本に於て既に絶るべきものを忘れた」ことで「正月は更に不安を新たにする」、すなわち信仰に裏付けられた、より深い部分での感動と安心を得ることはできない、とみるのである。「既に」とする言葉の裡にも推量がある。海南小記の旅は「内地では極めて古いものが琉球では眼前に厳存して居る」(柳田一九三四b・九七)ことを柳田に確信させた旅であつた。

三 「神に代わりて来る」

小正月の訪問者の行事に、さらに積極的な議論を試みたものが一九二四年一月の「神に代わりて来る」である。成城小学校教員の編集する『教育問題研究』に掲載された。著者名の上に「父兄」と記されており、成城学園に子を通わせる同じ父母に語りかける文体がとられている。議論の内容はこれまでにない、かなり大胆なものである。

前半では、全国に亘る小正月の子供の訪問行事を次々と紹介する。「小正月の晩」よりもさらに多くの事例が示される。各地からの報告や、郷土誌、近世地誌、随筆類などから集められた資料である。「ホトト」(鳥取県西部、伯耆出雲)、「コト」(備中上房郡)、「トロベイ」(広島県北部)、「トヘ」(周防山口付近)、「トビ」(鳥取県西部、伯耆防長門、筑前及び豊前中津、肥後国)、「オヒワイソ」(阿波石井付近)、「タビ」(千葉県東海岸、東上総)、さらに信州から東北の仮小屋を作る行事、越後や江戸のサイノ神勧進などの話題を挟んで、東北地方の「カセトリ」(福島宮城辺、伊達の桑折辺、梁川、会津、陸前北部登米郡桃生郡)、「餅ウチ」「餅キリ」(仙台付近)、「茶セゴ」(岩沼辺)などを数える。子供ではなく青年によるもの、特定の家のものが役を勤めるもの、そして、面を被り、墨を塗り、鼻を鳴らすなどの行為、あるいは訪問先の家人に水を掛けられる慣行などにも触れつつ、広く諸事例を提示している。「遠くかけ離れた地方に迄、同じ語の遺つて居るといふことは、少くとも其起源が偶然の慰みなどで無かつたことを思はせます」と遠方の一致をもつて、これら風習が共通する由来をもつことを示唆するのである。

後半では「初春の松の内に、何か目出たい言葉を聞かぬと、生活の不安が散じられぬといふ心持は、我々の親の代までも明らかにありました」と述べて、神を一定の社に祀るようになってからも、重要な期日には神が家々を訪れ人々と交流したことには多くの証拠があるとする。その折りには神の言葉を聞くための「よりまし」が立てられた

が、嚴重な物忌のもとで仲立ちを勤めるこのあり方は世の中が改まると信じ敬われなくなり、「万歳」「物よし」などの特殊の職業が起こった。「春駒」「鳥追い」「猿引き」「節季ぞろ」の類も、同様の「公認せられたる宗教機関」であつたと説く⁽³⁾。しかし信仰と生活との地方的相違から、必ずしも常にこの階級の上に任務を引渡すことができず、人口の少ない村落などでは、各地の小正月の訪問者の事例に見るような「第二種の形式」が行われるようになった。この方法をもつと古い時代から行っている民族もある。

一の部落の一定年齢の男子なり女性なりが、一団となつて神に仕へ祭を掌つて居る民族では、彼等は勿論他の人々よりは、一段と神に近いのですから、其言葉には力があります。ポリネシア種の土人の間に広く認められて居るアレオイや、或はメラネシアの島々に於て王よりも強力なるドウクドウクの秘密団体などは、色々の点に於て我邦のホト／＼カセトリと似て居て、更に何百倍か強力であつたのです。二つの者が偶然の一致で無いか否かは、今後の研究が決定するのでありますが、我々が予め之を注意して置きませぬと、もう日本の方では消滅して顧みられぬやうになる虞れがあります。私が此事に付て考へ始めましたのは、先年八重山の島に出かけて、島人が最も神聖視して居るマヤノ神の村巡りの話を聞いてからです。

(柳田一九二四b…六八～六九)

このように、ホトホトやカセトリを、ポリネシアやメラネシアの「秘密団体」である「アレオイ」や「ドウクドウク」⁽⁴⁾と関係付けて理解しようとする比較民族的な課題が提示される。その着想は海南小記の旅で聞いた「マヤノ神の村巡り」にあつたものである。

マヤの神の慣習が行われていたのは八重山の二、三カ村で、穂利祭である農事の祭日に、戌年生まれの二人の若者が、蒲葵の葉などで作った深い笠に蓑を着て家々を巡る。柳田はここでも、「さうして主人に対して神の語を伝へます。伝へると云ふより寧ろ神と為つて語ると言ふ方が正しいでせう」^{ママ八木注}と住民の共同主観に寄り添う見解を示してい

る。次いで柳田は、マヤの神に似て、同じ島の一、ニカ村には「赤マタ黒マタ」という仮面を被った二人の神が来ることを述べる。「此ことをニイルビトと謂ひ、赤黒二色の面をかぶる故と説明する者もありましたが、是も誤でニイルは遠い処、即ち我々が「常世の国」など、いふのと同じ語であります」と新聞連載「海南小記」の「二色人」に示した自らの説明に修正を加えている。

同じ「海南小記」の一回「遠く来る神」で、沖縄本島汀間の神アシャゲに迎えられる「ニライ神加奈志」に言及していた柳田にとって（柳田一九二二a）、「ニライ」「ニイル」の連想は容易であつた。柳田を追つた折口信夫の沖縄旅行の成果「琉球の宗教」は、すでに「にらい系統の語」から「神の在す遙かな楽土」を大胆に論じて、柳田の提起した問題を独特の方法で深化させていた（折口一九二三）。この時期の柳田、折口の緊密な交流を考慮すれば、「常世」の語を用いたニイルの解釈の更新はあり得べきことであつた⁽⁵⁾。

ニイル人は、村の巡回の数日前から特定の聖地で物忌みをし、村人は悉くこれを拝するが、心の正しくないものは番人が制止して近づくことを許されない。村民がニイル人を畏敬することはメラネシアの島々の「ドウクドウク」⁽⁶⁾などに近いものがある、と柳田は繰り返し指摘する。固い信仰があるために、ニイル人の言葉は神の教えとして受け入れられており、言葉を通じた村人との交流には一定の型がある。しかし一段と人の心持ちが改まれば「因幡伯耆のホトホトなどになるべきことは、想像に難くありません」というのである。

彼等は昔の信仰に由つて、人も選ばれて物忌をすれば、其期間だけ神となり得ることを疑ひませぬが、それでも尚ほ人間味を脱却する為には笠を深くし又は面を被ることが必要であつたのです。半は疑ひ半は頼りにする近世の内地の村で、注意深く姿を隠し又は鼻声で物を言つて、出来る限り誰であるかを知られまいとしたのは、自然の所作のやうに思はれます。其様子細かい心持を、次第に本人たち迄忘れてしまつて、更に変遷をすると、餅を貰つてあるく子供の遊びともなり、形が他の地方の乞食と似て居る故に、教育者が賤しんで之を制止せねばならぬやうなのです。

（柳田一九二四b・七〇）

ただし、子供が行事の担い手になることを、まったくの後の変化とする訳ではない。「小正月の晩にホトホトと戸を叩いて、神の詞を述べ神の恵を伝へに来る役も、夙くから子供にさせた地方があつたので、必ずしも青年がもとほして居たのを、後に幼い者が真似たのでは無いかも知れませぬ」として、地方的な多様性の中に、子供の行事が先行する可能性があることも留保しつつ稿を閉じている⁽⁷⁾。

四 『海南小記』と「阿遅摩佐の島」

『海南小記』は一九二五年四月に出版された。新聞連載の「海南小記」とほか四編を収録する。「阿遅摩佐の島」は巻末を飾る論考である。表題左に「大正十年二月二十一日夜、久留米市中学明善校にて談話。此夕大に雪ふる。」の文言が付されている。沖縄旅行帰途における講演「ビロウの話」をもとにしたもので、「阿遅摩佐」(アジマサ)は「蒲葵」すなわちヤシ科の常緑高木であるクバ、ビロウのことである。柳田は「コバ」とも表記している。「蒲葵島」(柳田一九一三^a)以来の関心事を、沖縄の知見をもとに論じ直したものである(柳田一九二五・三三三～三七九)。

コバの木の分布と保存に、神が参与して御出であることを知る為には、どうしても沖縄の島々を見てあるかなければなりませぬ。もとは異国の如く考へられた此島の神道は、実は支那からの影響は至つて少なく、仏法は尚以て之に対して無勢力でありました。我々が大切に思ふ大和島根の今日の信仰から、中代の政治や文学の与へた感化と変動とを除き去つて見たならば、斯うもあつたらうかと思ふ節々が、色々あの島には保存せられてあります。

(柳田一九二五・三四五)

この植物と沖縄の神祭りとの関わりを説くなかで、柳田は「コバ蓑とコバの笠も、やはり亦此葉で無ければならぬ仔細が、有つたやうに考へられます」として、八重山や奄美の神がその葉を身に纏つて来訪することに注意を促す。

八重山郡の島々で、或はニイル人と称して、一年に一度の節目に、ニライカナイの常世から、人の世界を見舞ひたまふ神があらります。我々の眼から見れば、それは正しく村内の二人の青年でありますが、彼等がこの蒲葵の葉を以て身を取装うて来るときは、村の者は乃ち之を神として迎へました。或部落ではニイル人の代りにマヤの神と称する二柱の神が、家々を巡つてあるかれます。マヤの神も深いコバの葉の笠を被り、蓑を着てあるのが定まりであります。北は奄美の諸島に於ても、昔は鈴のやうな形の笠に顔を隠し、助けの手ばかりを窓からさし入れて、百姓を憐れみたまひし神があつたと語り伝えへて居りますのは、多分に同じ慣習の記憶であり、尚やまとの島々の正月十五日の夜に、ホトトギス又はカセトリなどと名けて、顔を包んで餅を貰ひに来る遊戯も元は一つであらうかと思ひます。

(柳田 一九二四 b・三六九―三七〇)

このように沖縄の来訪する神々と「やまとの島々」の小正月の行事が、その「元」を共通にする可能性を語る。

何れにしても祭に携はる者の蓑笠は、決して南の島ばかりの奇風俗では無かつたので、恐くは「月笠着る、八幡種播く、い我等は」と高く唱へて神を送つて来た時代よりも以前から、近くは我々の田舎の盆の月夜に至るまで、神に代つて踊り又は舞ふ者の、必ず隠れ笠に由つて現世と遮断し、先ず我が心霊を淨く且つ高くせんとした、素朴な信仰の原の形であるやうに思はれます。

(柳田 一九二四 b・三七〇)

志多羅神の昔や地方の盆踊りばかりではない。そのことは「内地」の祭礼の「御一物」の依坐となる童児が、行列に面差しの隠れるほどにまぶかく笠を被る習わしによつても説明することができる。久高伊平屋の島々においても、「ニライ神ガナシ或はアマミヤ神ガナシ」と謂つて、遠い常世の国から船を漕ぎつつ、祭を享けに現れたまふ大神」があり、その姿が色々の点においてよく似ていると指摘する。

素よりノロと称する人間の女性が、仮に神を装うて出るのはありますが、信仰厚き者の笠の内の心持は、扮すると謂ふより

も寧ろ成ると謂ふ方が当つて居たやうでありまして、此の如き精神作用には亦コバの葉の力が多いのであります。

(柳田一九二四b・三七二)

「内地」の小正月の訪問者の行事と、沖縄のニイル人やマヤの神を繋いでみせようとする柳田の所論は、「神に代わりて来る」の主旨とほぼ同じである。「ニライカナイの常世から」という理解も、同稿のニイルビトの説明に一致する。『海南小記』本編の「二色人」の節でも、「赤と黒と二色の人と云ふことであると謂ふが、ニイルは即ち常世の国で、是も遠くより来る神の意であらう」との加筆が行われている。また「遠く来る神」の節では、「ニレイ神を待つて居たのである」という連載記事の箇所が「ニライ神の、遠くの島より寄り来らんことを待つて居たのである」と変更されている。

『海南小記』本編の加筆箇所と、「阿遅摩佐の島」の記述は相通じており、しかもそれは前年の「神に代わりて来る」とも重なる。「阿遅摩佐の島」は、講演時の手稿あるいは記録のままではなく、その後の柳田自身の思考の深まりを反映させたものであった⁽⁸⁾。南島談話会等を通じた人々との交流や、二度に亘る沖縄の旅を踏まえた折口信夫の成果が与えた影響も考慮されてよいであろう⁽⁹⁾。

五 柳田国男と比較民族学的関心

「神に代わりて来る」と「阿遅摩佐の島」を結びまひとつの共通点は、太平洋地域の民族誌的な研究成果への関心である。「阿遅摩佐の島」では、祭りの時だけに降臨する神のために、社殿ではなく「天然の靈域を御嶽として尊敬して居た」ことを説明して、石垣島宮良の御嶽を次のように描写している。

其細い径の行き止りに、何か樹木があつてそれが屢々コバであります。樹下には形の尋常で無い海石を、置いてあることがあります。正面僅かばかりの地には、清浄の砂が布いてありまして、其上にマガリと謂ふ素朴な土器を置き、或は二尺もある瑛瑛の貝が、仰向けにしてあることがあり、さうして又香炉があります。香炉の一部を除けば、他は悉くコドリングトンの、メラネシア誌に在る写真などと同じでありました。

(柳田一九二五・三五〇)

柳田は、「神に代わりて来る」でニイル人やマヤの神の向こうにアレオイやドゥクドゥクを見出したのと同様に、「阿遅摩佐の島」では、八重山の聖地の宗教的景観にメラネシアの民族誌に記録された風景を重ねている。たしかにコドリントンの『メラネシア人』(Coddington 1891)は、写生や写真をもとにした図版を多く含んでおり、同時にそれはメラネシアの「秘密団体」を知るための一冊でもあった¹⁰⁾。

蘭領東インドに始まる東南アジア、オセアニア島嶼地域への柳田の関心は比較的早く、「定本年譜」の一九一九年には「このころ島誌を多く読む」とある。海南小記の旅の後、国際連盟委任統治委員会委員として、ジュネーブを中心とする二度のヨーロッパ滞在時には、読書や研究者との交流を通じてさらに多くの知識を得ることとなった。広く「太平洋研究の学問が、著しく進んだ」(柳田一九二八b・一六)時期でもある。一九二四年に、柳田は太平洋地域の「島誌」の数々を「読了」している¹¹⁾。また太平洋研究の泰斗、ハッドンやリヴァーズに何度も言及してその業績に対する敬意を隠していない¹²⁾。

後年ながら、一九二八年『民族』収載の岡正雄「異人その他」によれば、柳田のいう「秘密団体」¹³⁾、すなわち岡の「秘密結社」は、メラネシアやポリネシアの社会生活の基本となるもので「之には未成年者や女子を参加せしめず、加入には厳重な入社式を施行し、時あつて異様の服装を纏ひ怪音を出してその出現を報じ、村々を横行して強奪威圧を敢えてし、或は祝詞を述べ、その他種々の行動を試みる」(岡一九二八・一〇六)ものであるという。当時、岡の利用した文献の大半は柳田の蔵書であり、岡が「私の研究にとつて大きな暗示である」(岡一九二八・一一五)と注

記したのは、リヴァーズの『メラネシア社会の歴史』(Rivers 1914)であった⁽³⁾。

柳田の「秘密団体」の理解がどの程度のものであったか、推測するに足る記述を得ることはできないが、大正末期における柳田は、リヴァーズを始め、コドリントン、ブラウンらの報告や研究に目を通していた可能性が高い。刊行直後のウィリアムソンの著作も役立ったであろう(Williamson 1924)。アレオイ、ドゥクドゥクその他の儀礼を並べて共通の起源を論じるリヴァーズの研究は(Rivers 1914: II 510-527) 柳田にとっても大きな暗示となったに違いない。

一方「秘密団体」とは別に、同時期の柳田に強い影響を与えた民族学、人類学の成果がハッドンの『人間の研究』(Haddon 1898)である。早くは一九二二年八月『信濃教育』の「子供の遊戯」と一九二四年九月『教育問題研究』の「小さき者の声」に言及がある⁽⁴⁵⁾⁽⁴⁶⁾。「子供の遊戯」は柳田の校閲を経ていないものであるというが⁽⁴⁷⁾、ハッドンの著書や人類学の雑誌を話題にしており、柳田の関心の在り処が素直に示されていると見てよい。もとは成人の儀礼であったものが、やがて子供の遊びに変化したとする説を紹介している。

未開人の宗教であるブル・ロアラ(牡牛の吼声)等もニウギニアの中間の群島では甲の島は子供の遊びであるが、乙の島は秘密の儀式として老人が行つてをつて、祭の日にはその音だけするといひますから甲乙共同じものなる事がわかるのであります。およそ儀式が亡びる時には子供の方へ移つて遊戯となつて痕跡を留めるものであります。(柳田一九二二b:二三)

「小さき者の声」では、「紙鳶」と「独楽」が「日本に入る以前、東西何れかの民族で、曾ては成人の真剣の勝負に用ゐられ、其面白味が年少者に理解せらるるやうになると、急激に速力を以て忽ち此地球の全陸面に普及した」と、同じくハッドンの説くところを紹介する。次いで「世界の果の島までも行渡つた遊び」である「緩取り」に話題を移し、「日本では七通りかの変化があつて、もとは一々の名がありました、今の子供はもう忘れてゐます」との認識

を示す。

況や其起源に於て、祭を掌つた或民族の長老たちが、神の始を説く為の重々しい表現法であつたことを、知つて居る者などは無かつたのです。児童が狹隘なる経験と記憶の許す限で、尤も変化の多い興味を捜しまはる活発さを持たなかつたのなら、彼等の長上たちは世の終に至るまで、人間の経歴の主要なる一部分を学ぶこと無くして過ぎてしまはねばならなかつたのです。闘争無しには遭遇することも出来ぬやうな色々の民族の間に歴史の伝へざる或昔の接触があり、はた血縁があり、さうで無ければ遠く隔絶して居ても、同じやうな場合には同じやうな考へ方をしたと云ふことが、斯ういふ幽かな遺物の集積から、追々に立証せられ得ることを考へますと、自分たちも一度だけは普通の子供であつて、友だちと共に大きい児から学んだことを、小さい次の児に教へて置いて来たことが、非常に幸福であつたことを感じます。

(柳田一九二四 a : 一二—一三)

成人による宗教的な儀式が時を経て、子供の遊戲となつて伝えられたがゆえに、それら「幽かな遺物の集積」から、異なる民族同士の接触や混淆の事実、あるいは同様な条件の下で相似たものが独自に生み出された経緯などを明らかにできるのではないか、と柳田は考へている。「内地」の小正月の訪問者の行事を「其様子細かい心持を、次第に本人たち迄忘れてしまつて、更に変遷をすると、餅を貰つてあるく子供の遊びとも」なつたものとみた柳田は、これを青年が神を装い村を巡つて言葉を伝えるニイル人やマヤの神の祭祀に繋がるものと捉え、さらにその南の彼方に太平洋島嶼地域の「秘密団体」を見通したのである。

六 「雪国の春」とナマハゲ

一九二六年『婦人之友』一月号に掲載された「雪国の春」は、対象を北に転じ、東北日本の季節の春と「暦の春」

との「二つの春」を説いた。「暦の春が立ち還ると、西は筑紫の海の果から、津軽南部の山の陰に及ぶまで、多くの農作の儀式が少しの変化も無しに、一時一行に行はるゝこと、今猶昨の如くであつて、而も互ひに隣国に同じ例のあることも知らぬのは、即ち此等の慣習の久しい昔から、書伝以外に持続して居たことを意味する」として、「正月望の日」の鳥追い、土鼠打ち、成木責、管粥などの「農作の儀式」が北と南に同様に行われること、年占としての綱曳の行事も雪国の多くの町に行われる他、朝鮮半島では同じ日に行われ、また日は違ふが沖繩八重山の島々でも行われたことを指摘する。話題は暦の一致から転じて、沖繩と本土の比較へと移る。前稿拙論と重なるが、続けて肝心のくだりを引用する（八木二〇一〇…一五～一六）。

同じく穀祭の前には二人の若者が神に扮して、此等の孤島の村々にも訪れた。本土の各地では其神事がや、弛んで、小児の遊戲のやうにならうとして居るが、これも正月十五日の前の宵で、或はタビ／＼トビ／＼と謂ひ、又はホト／＼コト／＼など、戸を叩く音を以て呼ばれて居るのみで、祝言を家々にもたらす行事は一である。宮城福島に於ては茶せん子とも笠鳥とも謂つて居る。それが今一つ北に行くと、却つて古風を存して南の果に近く、敬虔なる若者が仮面を被り、藁の衣装で身を包んで、神の語を伝えに来るので、殊に怠惰の者を憎み罰せんとする故に、之を「なまはぎ」とも「なごみたくり」とも、又「ひたかたくり」とも称するのである。閑伊や男鹿島の蝦夷の住んだ国にも、入代つて我々の神を敬する同胞が、早い昔から邑里を構へ、満天の風雪を物とせず、暦が春を告ぐる毎に古式を繰返して、歳の神に仕へて居た生活の痕である。

（柳田一九二六a・六〇）

柳田は、海南小記の旅以来、八重山の島々の「穀祭」と、本土各地の「小児の遊戲」のような一群の小正月行事とを、何度も繰り返して対比してみせた。ここに至つて、本土の北辺にありながら「却つて古風を存して南の果に近く」、ニイル人のように「敬虔なる若者が仮面を被り、藁の衣装で身を包んで、神の語を伝えに来る」行事を、両者を媒介するものとして「発見」してみせたのである。すなわち、東北地方のナマハギ、ナゴミタクリ、ヒカタタクリ

などの習俗がそれであつた。小正月の訪問者の行事の中に、初めてナマハゲとその類例を加えたのが、この「雪国の春」であつた。

あらためて柳田とナマハゲの關係を確認しておく。「ナマハギ」は明治中期以來、「生剥」の表記で『東京人類学会雜誌』や『風俗画報』の年始風俗の報告の中に、いくつもの記事を見出すことができる。柳田はすべてに目を通していたはずである。一部を除けば、その多くは秋田の新聞人、狩野徳藏『秋田雄鹿名勝誌』（二八八四年）の記述をなぞつたものであつた（八木二〇〇九・八六・八八）。

他方、「ナゴミタクリ」は、遠野の佐々木喜善の報告に始まる。『遠野物語』受贈の札状（一九一〇年六月一八日柳田宛書簡）に、「なほ正月の十五日の行事の中には、ナモミタクリ、カセギドリ、などの世話しおとしておることに気がつき申候 たゞ此処にてハ、貴方ばかり話しおくべく候」の一文がある。柳田に対して直接に、『遠野物語』の追加となる情報を伝えている。

ナモミタクリと言ふのは十一月冬に入つてより炉にあたりゐて 脛に火形のたかり居る者のその火形を小刀にてはぎに来るのなり、すねの皮をはがれるの故餅を出してお詫びをして返すと言ふ一例。

カセギドリと言ふのは、字々の若者共藁にて鶏のやうに羽を造り来て、隣村のカセギドリと争をいどみにゆくものなり、先づ今夜は某村のカセギドリが来ると聞くと、その村の長者の家に村の者集り、ハギリ（桶の大きい物）を十も二十もに水を一杯にくみためおきて いろいろの物にて そのカセギドリに水を打ちかける。それにおくせず進んで来て供へおきし餅をとる、そうすると、別の村のカセギドリが途中に待つてゐていどむ、敗けし方は餅を皆とられてしまふ也 （佐々木二〇〇三・二）

佐々木没後の出版になる『遠野物語 増補版』には、「ナモミタクリ」「ヒカタタクリ」と「カセギドリ」の項目も含まれているが（柳田一九三三・三六二・三六三）、書簡直後の柳田の反応に格別なものではなかつたであらう。佐々木は

一九一四年一月の『人類学雑誌』に、自ら「陸中国遠野郷にての冬期に於ける年中行事の一例」を報告し、正月行事を紹介する中でこれらの説明に行数を割いた。ヒガタタクリとナモミタクリは同じものである。カセゴドリの説明は柳田宛書簡よりも詳しい（佐々木一九一四・三七―三八）。

佐々木と同じ遠野の人で人類学者、遠野研究の先達でもある伊能嘉矩は、一九一九年一月の『人類学雑誌』に「風俗の溯源より観たる陸中遠野地方の新年慣行」を発表して「ヒガタタクリ」の風習に考察を加えた。遠野郷を中心とする村々にヒガタタクリという「小正月の余興的行事」がある。「異装せる男子が、瓢に小刀を挿したるを腰に纏ひつつ、ヒガタをタクルとて、家々を音なひ、若干の祝儀を受け去るもの」である。ヒガタは火形を意味する方言で、終日炉辺炬燵に寄りつくと生じる斑点をいう。これを剥ぎ去ることは「自ら旧を去りて新に就くてふ縁喜にも通へるなり」との解釈を示している。さらに伊能は「羽後の別境男鹿地方の風俗をものせる旧記なる、牡鹿嶼国（菅井真澄著）を閲するに、趣味深き左の一記事を載す」として、菅江真澄『牡鹿の嶋風』（文化七年）の「ナマハギ」の一節を引用し、それがヒガタタクリと共通する習俗であることを示した。

ナマハギ、は即ち所謂ヒガタタクリなり、我に在りては、単に一種の余興として認めらるゝに過ぎざる如きも、彼に在りては、較や厭勝としての儀式の痕跡を存するに似たり、要するに、寒国の常習に伴ひて、古るく發生せりし純然たる厭勝なりけるに、代を経て時の移るまゝに、原始の意味を薄らげつゝ、余興の形と變ずるに至りしにて、男鹿の風は、其中間の過渡の状態を示し、遠野の風は、其末路なる告朔の餼羊としも見んか。

（伊能一九一九・二九―三〇）

地元のヒガタタクリと男鹿のナマハギを時代と場所を超えて比較することにより、それが同じ「厭勝」すなわちまじないとして発生したものであり、時を経てもとの意味が薄らいでいく中、男鹿の風習はなお「過渡の状態」を示し、遠野の風習は形ばかりになったというのである。続く成木貞の説明でも、「此風習は啻に遠野一郷のみならず、

旧南部領及び仙台領津軽領にも盛に行はるゝ」ことを指摘しており、後に伊能を追悼する柳田が「日本一国の学者の態度を以て其郷土を研究」(柳田一九二六b:二)したと評する一端が示されている。

柳田は一九二〇年八月から九月にかけての、いわゆる「雪国の春」の旅で遠野を訪ね、旧知の伊能に面会している。後年、柳田自身がまとめたとされる「大正九年八月以後東北旅行」の原稿によると(鎌田二〇〇〇:二八八)、小正月行事も話題のひとつであった。

同十五日にはカセギトリがある。地方によつてはカセゴとも謂ふらしい。注連飾りを以て鎧のやうなものを作つて著し、隣の村に餅を取りに行く。村と村の争である。火カタタクリの風は、羽後の男鹿半島にもあると、真澄遊覧記に出て居るが、此辺のと若干の異同がある云々。以上伊能氏談。海岸大槌のあたりでは之をナゴミタクリ。ナゴミは火かたのこと、又同時に化物のことをいふと、宿屋の主人の話。

(柳田二〇〇〇:二六二―二六三)

上閉伊郡大槌には松本信広と佐々木喜善が同道している。この時のやり取りは他にも言及がある。

私は前に岩手県沿海を旅して居た際に、閉伊の大槌の宿舎に於て詳しくあの土地のナゴミタクリの話を聞いた。爰ではこの小正月の訪問者を、モウコ、ガンボウ又はナゴミタクリと謂つて居た。モウコもガンボウも共に畏ろしいものを意味して居る。ナゴミといふのは何の事ですか、と知らぬ顔をして私は尋ねてみた。さうすると宿の主人の年四十余なる者が、生真面目にやはり妖怪のことでござりましょう。此辺ではナゴミは怖いものだと思つて居ますと答へた。

(柳田一九三四a:一一―一二)

海南小記の旅の前には、ナマハゲとその類例に関する知識、あわせてカセギトリについての知識は、すでに柳田の確認するところとなつていた。おそらくは、この時期の柳田のナゴミタクリへの関心は、「モウコ」「ガンボウ」に通

じる、いわば化物、妖怪であり「稍零落せんとする前代神の姿」（柳田一九三四 a・二〇）に対するものであった。また、若者の行うカセギドリについても、子供の宗教性を重視した当時の柳田にとっては、中心的な課題として焦点を結ぶに至らなかったものと思われる。

柳田は旅の最後に秋田に立ち寄り、秋田図書館において「真澄遊覧記」に目を通してゐる。菅江真澄の研究は旅の目的のひとつであつたと考えられている（石井二〇〇〇・五―一〇）。

おわりに

当初に柳田が注目したのは、小正月に道祖神の依坐となる童児の神性であつた。そこからホトホトやカセドリのよな、全国各地の、子供による小正月の訪問者の行事へと関心は移り、続く海南小記の旅を通じて、彼方から訪れるニイル人やマヤの神のまつりを知るところとなる。その後は、沖繩におけるこれら若者が神に扮する行事と、本土の小正月の子供の行事との対比が主要な課題となつた。同じ頃、太平洋島嶼地域の秘密団体における成人の仮装を伴う儀礼との関連を想定した。前後して、子供の宗教的役割とは別に、成人による儀礼がやがて子供の遊戯と化す広範な諸事例を知ることになった。

これらすべての問題が出揃うのは一九二四年一月の「神に代りて来る」である。そこから一九二五年四月の『海南小記』出版を経て、一九二六年一月の「雪国の春」に至るところで、子供の行事ではないがゆえに、そして信仰の衰えた姿とみなされていたがゆえに、視界から外れていたナマハギやナグミタクリが「再発見」された、というのが小論の到達した理解である。前稿で論じたように、一九二五年一月四日の『東京朝日新聞』の「ナモミ剥ぎ」の記事が、柳田にとって啓示となつた可能性は小さくない。その場合には、この記事にこだわりを示し続けた折口信夫の関

与についての信憑性が増す（八木二〇一〇）。

一九二七年五月、「雪国の春」の翌年に柳田は男鹿半島を巡り、成果は同年七月「をがさべり」の新聞連載となった⁽¹⁸⁾。その「(六)」は、ナマハギから説きおこし、本土各地の青年や小児の訪問行事を数えたのち、「海を越えて遙か南の、八重山群島の村々には、また男鹿と同じく、至つて謹厳なる信仰をもつて、これを迎へて一年の祝ひごとを、聴かうとする風習がある」と解説している。主旨は「雪国の春」と同じであるが、ここではナマハギが主役となった。

一九二八年三月『雪国の春』が刊行された。「雪国の春」と「をがさべり（男鹿風景談）」が収録されており、カセギドリやパカパカなど正月行事を話題とする「真澄遊覧記を読む」も書き下ろされた。長きに亘る一連の考察に区切りがつき、ナマハギについての詳細な理解が示されたといえる。

ただし、それは安定した解釈が得られたことを意味する訳ではない。新聞連載と単行本を比較すると、いくつかの書き換えが行われている（石井二〇〇六…五二～五四、八木二〇一〇…一七～一九。新聞連載になかった「この小正月の晩に来る蓑笠の神様」や「本来の我々の年の神の姿」などの「神」の表現は（柳田一九二八a…二七～二七三）、わずかながらも行為者の主観に添おうとする話法であり、一時的な柳田の高揚感に支えられたもののように見える⁽¹⁹⁾。

柳田によるナマハギのその後の解釈を知るには、「行商と農村 野の言葉（三）」（一九三一年）、「年木・年棚・年男——正月行事の変遷——」（一九三二年）、「妖怪古意——言語と民俗との関係——」（一九三四年）などを慎重に吟味する必要がある。これらを論じる紙幅は残されていないが、端的に言えば、やがて一国民俗学に自信を深めゆく柳田からは、比較民族的な関心が影を潜め⁽²⁰⁾、その一方で、小正月の訪問者の行事を理解するために、「神」であることよりも「年神の神主」（柳田一九三二…一二～一三）となること、神を演じる「わざおぎ」であることを説明原理とするようになる⁽²¹⁾。後の『歳事習俗語彙』で「小正月の訪問者」を見出しとしたように（柳田編一九三九…二八二、眼前の事実を

重視する柳田は、「まれびと」や「来訪神」の高みに小正月の訪問者を引き上げることとはしなかった。小論もまた一貫して「小正月の訪問者」を用語とした。

この小論を昨年三月に逝去された恩師伊藤幹治先生のご霊前にお捧げいたします。

付記 柳田文庫蔵書の閲覧を許可された成城大学民俗学研究所（松崎憲三所長）に謝意を表します。

註

- (1) 綱引き、石合戦、競渡、筒粥、胡桃焼、成木責の習俗などが正月十五日やその前夜に集中を見せることについては、すでに一九一三年『郷土研究』の「託宣と祭」に指摘がある（柳田一九一三・二）
- (2) 『風俗画報』『新編風土記二十五』『日本奇風俗』『南総之俚俗』『北越雪譜』などから得た二次的、間接的な資料である。
- (3) 二度の沖縄調査を果たしていた折口信夫も、沖縄の島々の神祭りの「一年の生産の祝福・時節の移り易り、などを教へに来る神わざを、段々忘却して人間が行ふ事になつた例は、内地にも沢山ある」として、「節季候」「万歳」「ものよし」に言及している（折口一九二四・三八―三九）。柳田「二色人」を踏まえた議論である。
- (4) 「神に代わりて来る」を収録した『小さき者の声』（三国書房、一九三三年）では「ヅクヅク」と表記され、以後の刊行本でも踏襲されている。
- (5) 「琉球の宗教」には、柳田の教示によることを示す注書きが二か所にある（折口一九二三・七八、九四）。他方、柳田の「常世の国」の語の使用は、折口「妣が国へ・常世へ」（一九二〇年五月）との関係を思わせる。これらに直接言及したものではないが、井之口章次は「折口の言ったことが柳田の文中にあり、もちろん逆の場合もある。どちらが取ったというようなことを、軽々しく言うべきではない」と述べている（井之口一九九四・一八一）。
- (6) 『小さき者の声』（三国書房）では「duk-duk」と表記され、以後の刊行本でも踏襲されている。
- (7) 福田アジオは「年中行事や祭祀行事と子供の遊びに連続性を見る立場と、神事祭祀や年中行事における子供の神性から来る担い手としての両面」があることを的確に指摘している（福田一九九三・一四九）。

(8) 赤坂憲雄も「その内容の周到な運びと分量的な豊かさから推して、大幅な加筆・増補が行われたことがたやすく想像される」としている（赤坂一九九七・八一七）。

(9) 岡正雄は「談話」が学界交流の重要なメディアであるような当時の民俗学界では、このプライオリティの問題がはっきりしないのも一面当然とも思われます」と語っている（岡一九七三・一四七）

(10) コドリントン以外に、ブラウンの著書にも写真や図版が多数収載されている（Brown 1910）。柳田文庫の同書に柳田自身の書き込みが多く残されている。

(11) 柳田文庫の洋書を調査した田中藤司の研究を参照すれば、一九二四年五月から一月にかけて、柳田が巻末に読了を自記した東南アジア・オセアニア関係の書物は十指に余る（田中一九九八・二一一）。

(12) リヴァーズへの高い評価は、「青年と学問」（一九二五年五月長野県東筑摩郡教育会講演）からも窺うことができる（柳田一九二八b・一〇四六）。

(13) 柳田は「青年団の自覚を望む」（一九一六）において、「或学者によつて秘密結社などと訳されて一寸ぎつくりした南島野蛮人民の成年式など」と述べており（柳田一九六四・一五三）、それが「secret society」のことであれば「秘密結社」の訳語には不満があったことになる。なお、初出掲載誌『奉公』一六三は発見されていない。

(14) 一九二四年、岡正雄が利用を許された柳田邸の書棚に備わっていたもので（岡一九七三・一三〇）、「岡正雄年譜」によれば、岡は同年後半にこれを熟読している（岡一九七九・四八二）。

(15) 同書は柳田文庫に架蔵されていないが、『新たな太陽』（一九五六年）所収の「正月と子供」（初出掲載誌不明）にも言及がある（柳田一九五六・八四―八五）。

(16) 「小さき者の声」は成城学園教師の岸英雄により口述筆記されたものという（小田一九九八・六三四）。「童児の昔」と改題されて『小さき者の声』（三國書房）に収録された。

(17) はしがきで福島小学校の小池直太郎が掲載の経緯を説明している（柳田一九二二b・一）。「定本柳田国男集」に収録はなく『柳田国男全集』に収められた（佐藤二〇〇〇・五六）。なお、ハッドソンの名は「ハッドソン」と表記されている。

(18) 『東京朝日新聞秋田版』に一九二七年七月五日から一五回に亘って連載された。近年、初出連載記事の存在が確認された（石井二〇〇六・五一―五六）。秋田市の西宮正男が編集した切抜帳『古今帖』（秋田県議会図書室）にすべて貼付されているが、各回の掲載日は特定できない。

- (19) 折口信夫「常世及び「まれば」と」(一九二九年一月)の掲載にまつわるいきさつが想起される(岡一九七三・一三五～一三七・西村一九九二・九九九～三三六・八本二〇一〇・二〇～二二)。

- (20) 「南太平洋の多くの島々で、**Dak-dak** その他の名を以て知られて居る神秘行事と、細かく比較をして見なければならぬ重要現象の一つであるが、其点是他にも発表したものがあるから今は説かない」としたのが、柳田による言及の最後である(柳田一九三四a・八)。なお、「異人その他」でナマハゲに触れなかった岡正雄は、戦後の「日本民族の起源」の座談会で「東北のナマハゲ、コトコト、バカバカとかいわれる習俗ですが、小正月の晩、あるいは月夜の晩に、村の若者が仮面仮装して気味の悪い音をたてて家々を訪れてくる。時には闖入してきて食物や金を強請し、女や子供をおどしたりしてゆく。琉球におけるこれに類似する風習をあいだにおくと、メラネシアの秘密結社との近似がいちじるしくなってくる」と発言している(石田他一九五八・七四)。また、一九六三年の「日本民族文化の諸問題」では、「わが国における仮面仮装者複合ないし正月十四日のナマハゲ系行事」との表現で、同様にメラネシアとの一致を説いている(岡一九六三・二二)。
- (21) 「文化映画と文化」(のち「スネカの行事」)では、「もとは一歳の最も神聖なる深夜に、尊い神様が家々を訪れて、訓戒を垂れたまふことを表示したわざおぎであつたのが、後には小児しか畏れをの、かない、一つの行事となつて残つて居るのである」(傍点柳田)と説明している(柳田一九四〇)。

参考文献

奥付の発行月を付すべきと判断した文献については、それぞれの末尾に括弧書きで示した。

赤坂憲雄 一九九七「解題 海南小記」『柳田国男全集 三』、筑摩書房、八二～八一七頁

安藤英方 一九一五「因幡の上元習俗」『郷土研究』三三四、四五～四八頁(六月)

石井正己 二〇〇〇「柳田国男の菅江真澄研究」『真澄研究』四、一～三九頁

石井正己 二〇〇六「真澄と柳田国男(二)——「真澄遊覧記」刊行の実験——」『真澄研究』一〇、五一～七七頁

石田英一郎他 一九五八「日本民族の起源 対談と討論」平凡社、三三三頁

伊能嘉矩 一九一九「風俗の溯源より観たる陸中遠野郷地方の新年慣行」『人類学雑誌』三四―一、二八～三二頁(二月)

井之口章次 一九九四「折口信夫——その研究と方法——」瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス「増補版」ペリカン社、一七一～一九二頁

岡正雄 一九二八「異人その他」『民族』三一六、七九～一一九頁(九月)

岡正雄 一九六三「日本民族文化の諸問題」『関敬語編』『民俗学』角川全書、二二三～二四〇頁

岡正雄 一九七三「連載インタビュー 柳田国男との出会い」(聞き手：谷川健一・伊藤幹治・後藤総一郎)『柳田国男研究』創刊号、一二七～一五五頁

岡正雄 一九七九『異人その他 日本民族の文化の源流と日本国家の形成』言叢社、四八九頁

小田富英 一九九八「解題 小さき者の声」『柳田国男全集 七』筑摩書房、六二九～六三七頁

折口信夫 一九二〇「姥が国へ・常世へ」『國學院雜誌』四六―五、五七～六九頁(五月)

折口信夫 一九二三「琉球の宗教」『世界文庫刊行会編』『世界聖典外纂』同刊行会、七七～九四頁(五月)

折口信夫 一九二四「呪言の展開―日本文学の発生 その二―」『日光』一一三〇、三五～四七頁(六月)

折口信夫 一九二九「常世及び「まれば」と」『民族』四―二、一～六二頁(二月)

鎌田久子 二〇〇〇「追い書」『民俗学研究所紀要』二四別冊、二八四～二九三頁

佐々木喜善(佐々木繁) 一九一四「陸中遠野郷にての冬期に於ける年中行事の一例」『人類学雑誌』二九―一、三四～三八頁

(二月)

佐々木喜善 二〇〇三『佐々木喜善全集 IV』遠野市立博物館、六四五頁

佐藤健二 二〇〇〇「解題」『柳田国男全集 二六』筑摩書房、五五五～五九〇頁

田中藤司 一九九八「柳田文庫所蔵説了自記洋書目録・略年表」『民俗学研究所紀要』二三別冊、一～二六頁

西村亨 一九九九「折口信夫とその古代学」中央公論社、三九九頁

福田アジオ 一九九三「民俗学と子ども研究―その学史的素描―」『国立歴史民俗博物館研究報告』五四、一四五～一六一頁

八木康幸 二〇〇九「近代における民俗文化の発見とその知識、情報の普及過程―男鹿のナマハゲを事例として―」『関西学院史学』三六、七九～一八八頁

八木康幸 二〇一〇「なもみはげたか―折口信夫、柳田国男とナマハゲに関するノート―」『人文論究』六〇―一、一～二六頁

柳田国男(柳田生) 一九一三a「蒲葵島」『郷土研究』一一二、一三～二四(四月)

柳田国男(川村香樹) 一九一三b「託宣と祭 巫女考の三」『郷土研究』一一三、一～一〇頁(五月)

柳田国男(尾芝古樟) 一九一五「柱松と子供」『郷土研究』三―三、一～一頁(五月)

柳田国男(尾芝古樟) 一九一七「トビトビ」『郷土研究』四―一二、四九～五〇頁(三月)

- 柳田国男 一九二一 a 「遠く来る神」『東京朝日新聞』一九二二年四月一日（四月）
- 柳田国男 一九二一 b 「二色人」『東京朝日新聞』一九二二年四月三〇日（四月）
- 柳田国男 一九二二 a 「小正月の晩」『東京朝日新聞』一九二二年一月一六日（一月）
- 柳田国男 一九二二 b 「子供の遊戯」『信濃教育』四三〇、一〜四頁（八月）
- 柳田国男 一九二四 a 「小さき者の声」『教育問題研究』五四、三〜一三頁（九月）
- 柳田国男 一九二四 b 「神に代りて来る」『教育問題研究』五六、五九〜七二頁（二月）
- 柳田国男 一九二五『海南小記』大岡山書店、本文三七九頁（四月）
- 柳田国男 一九二六 a 「雪国の春」『婦人之友』二〇一、五二〜六一頁（一月）
- 柳田国男 一九二六 b 「序」伊能嘉矩『遠野方言誌 附閉伊地名考』郷土研究社、一〜二頁（六月）
- 柳田国男 一九二八 a 「雪国の春」岡書院、三八〇頁（二月）
- 柳田国男 一九二八 b 「青年と学問」日本青年館、三五二頁（四月）
- 柳田国男 一九三一「行商と農村」『農業経済研究』七一、二四〜五七頁（四月）
- 柳田国男 一九三二「年木・年棚・年男」『郷土研究』六一、一〜一三頁（三月）
- 柳田国男 一九三三「小さき者の声」玉川学園出版部、一〇六頁（四月）
- 柳田国男 一九三四 a 「妖怪古意―言語と民俗との関係―」『国語研究』二一四、八〜二二頁（四月）
- 柳田国男 一九三四 b 「民間伝承論」（現代史学大系七）共立社書店、二九三頁（八月）
- 柳田国男 一九三五『遠野物語 増補版』郷土研究社、四一七頁（七月）
- 柳田国男 一九四〇「文化映画と文化」『朝日新聞』一九四〇年九月一九日
- 柳田国男 一九五一「瑞穂国について」『國學院雑誌』五二一、六〜二一頁
- 柳田国男 一九五六『新たな太陽』修道社、二〇三頁
- 柳田国男 一九六四「青年団の自覚を望む」『定本柳田国男集 二九』筑摩書房、一五一〜一五五頁
- 柳田国男 二〇〇〇「大正九年八月以後東北旅行」『民俗学研究所紀要』二四別冊、二三五〜二五七頁
- 柳田国男編 一九三九『歳時習俗語彙』民間伝承の会、本文七〇三頁
- Brown, G. (1910) *Melanesians and Polynesians : their Life-Histories Described and Compared*, MacMillan and Co.

- Codrington, R. H. (1891) *The Melanesian : Studies in their Anthropology and Folk-Lore*, Clarendon Press.
- Haddon, A. C. (1898) *The Study of Man*, G. P. Putnam's Sons.
- Rivers, W. H. R. (1914) *The History of Melanesian Society* vols. I-II, Cambridge University Press.
- Williamson, R. W. (1924) *The Social and Political Systems of Central Polynesia* vols. I-III, Humanities Press.

——— 文学部教授 ———